アゴラ

歴史探究としてのマスク史

――NHK E テレ「歴史デリバリー 日本人はきれい好き？」（2022 年 1 月 2 日放送）の監修を務めて

2021 年 9 月 9 日に東アジア環境史会議で企画したマスクパネルを終えて一息ついていた 9 月下旬、学校給食マスクを中心とするマスクの歴史について問い合わせをいただいた。年明けに NHK E テレ（教育テレビ）で「歴史デリバリー」という番組を放送するという。メール数回と遠隔通話 2 回のやりとりのあと、マスク史の部分の歴史監修を務めるとともに、短い解説を話すことになった。

ここでは、番組で用いられた歴史資料について解説するとともに、監修として番組制作に関わった経験について紹介する[1)]。

1．「レキデリ」と「歴史デリバリー」

NHK E テレ「歴史デリバリー 日本人はきれい好き？」（2022 年 1 月 2 日（日）20：45 ～ 21：30 放送）は、2019 年秋から放送されている中高生向けの教育番組「アクティブ 10（テン） レキデリ」のはじめての特別編として制作された。

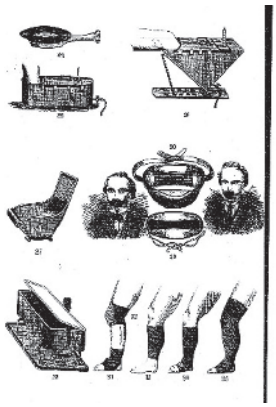
「アクティブ 10」は、学習指導要領で掲げられた「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」を重視して制作されている 10 分の教育番組で、「レキデリ」のほかに「公民」、「理科」、「マスと！」（数学）、「プロのプロセス」、「ミライのしごとーく」がある。「レキデリ」とは、歴史資料デリバリー会社の略である。お笑いトリオ「東京 0 3（ゼロさん）」の角田（かくた）晃広氏が歴史資料デリバリー会社の配達員として、番組内番組「歴史にズバリ！」のスタッフに扮する飯塚悟志氏と豊本明長（あきなが）氏のもとに歴史資料を届け、その資料から歴史の疑問を読み解いていく。

これまで制作された 20 本の動画やあらすじはすべてウェブサイトで公開されている（https://www.nhk.or.jp/school/syakai/rekideli/）。科学史・技術史に関わるものには「稲作は社会をどう変えた？」、「蝦夷錦はどこから来た？」、「江戸時代 なぜ数学がブームになった？」、「戦後 なぜ経済復興が進んだ？」などがある。

その「レキデリ」の特別編として制作された「歴史デリバリー 日本人はきれい好き？」は、トイレの後の手洗い、お風呂、マスクの 3 つの話題から構成される。出演者も東京 03 の 3 人に加えて、滝沢カレン氏、また歴史資料デリバリー会社の社員として近藤春菜氏（お笑いコンビ「ハリセンボン」）が加わった。そして、歴史監修の私も「歴史デリバリー研究員」として VTR で登場し、資料からは読み取れない内容について解説した。さらに、平安末期の廁や江戸時代後期の銭湯の様子も再現され、「読み解き」コントが挿入された。筆者以外の歴史監修は、鎌倉佐保（荘園）、福嶋啓人（ひろひと）（風呂）、千葉公慈（こうじ）（仏教）の各氏だった。

2．5 つの資料を読み解く

マスクパートではじめに登場したのは明治時代のマスクである。20 年以上にわたって骨董市に通う平井有（たもつ）氏（北多摩薬剤師会）のコレクションにある、榊原（釈次郎（はつじろう））製「呼吸器」をもとにレプリカが作成された[2)]。このマスクの箱に描かれているものと同じ絵が付された広告が図 1 である。これは『中央新聞』1899 年 12 月 14 日に掲載されたもので、林丈二（じょうじ）の『文明開化がやって来た』でも取り上げられている[3)]。このマスクを飯塚氏が実際に口につけて「（すーはー）あ、なんかあったかい」という感想を述べ、近藤氏が「もともとはイギリスで作られたもので」と解説した。



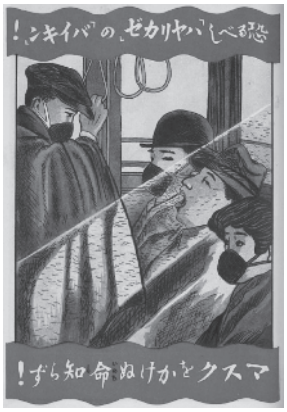


図　左上から右へ。

1 『中央新聞』1899 年 12 月 14 日、5 頁。

2 『郵便報知新聞』1879 年 2 月 14 日、8 頁。

3 宮武外骨編『文明開化 2 広告篇』半狂堂、1925 年、69 頁 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1182351/42。

4 松本市左衛門編『医療器械図譜』1878 年、95–96 頁 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833113/52。

5 内務省衛生局編『流行性感冒』1922 年 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/985202/80。

6 『写真週報』1944 年 5 月 17 日号、3 頁 https://www.digital.archives.go.jp/item/3693486。

イギリス由来というのは、『現代思想』2020年5月号の論文で明らかにしたことである[4]。1879年に図2、3の広告を出した松本市左衛門がその前年に出版した『医療機械図譜』に「ヱフライ氏ノ護息器」と書かれていたことから、ジュリアス・ジェフリーズ（Julius Jeffreys, 1800–1877）が、ロイヤルソサエティー会員になる4年前の1836年に特許を申請したものだと特定できた（図4）[5]。1862年のロンドン万国博覧会にも出品されたので、福澤諭吉ら文久遣欧使節がつけた可能性もある。1879年の広告からは、これが寒さとそれに起因する「寒冒」を防ぐものだったことが分かる。なお、『東京絵入新聞』1880年11月24日の岳陽堂平尾賛平による呼吸器の広告には、「船中または諸製造所において薬気を吸入するか風塵（ごみ）の中にて業を営む人」という文言がおり、工場での使用について述べられている。

2つ目の資料は1920年2月に内務省衛生局が全国に配布したインフルエンザ予防のポスターである（図5）。これは2020年以降さまざまな場所で紹介されており、説明は不要だろう。ただ注意が必要なのは、1918年以降のインフルエンザの流行のなかで多くの人々がマスクをつけていたのは1920年1～2月の1、2か月間だけだったということである[6]。このことは新聞記事からも分かるが、たとえば、速水融（あきら）『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ』（2006年）の章扉の写真のうち、マスクが使われているのはすべて1920年1月のものである[7]。

3つ目の資料は、学校給食マスクの例として、1957年のNHKニュース「灘尾〔弘吉（ひろきち）〕文相学校給食を見学」の画像だった[8]。それを背景に近藤氏がPCを立ち上げ、私が「歴史デリバリー研究員」として、3文のコメントを加えた。

> 最新の研究によると、外国では、給食でマスクをつける習慣はほとんどありません。日本では、太平洋戦争のころに、給食の準備でマスクをつけていた小学校がありました。その後、国や自治体が勧めたわけではありませんが、それぞれの学校で自然発生的にマスクが広まっていったと考えられます。

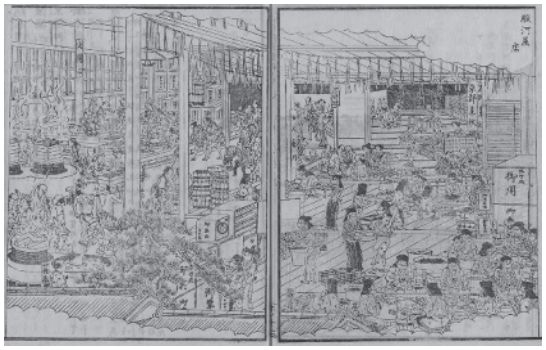
これは事前に台本を確認し、収録当日（12月15日（水））もスタッフの方々とともに調整を加えたものである。

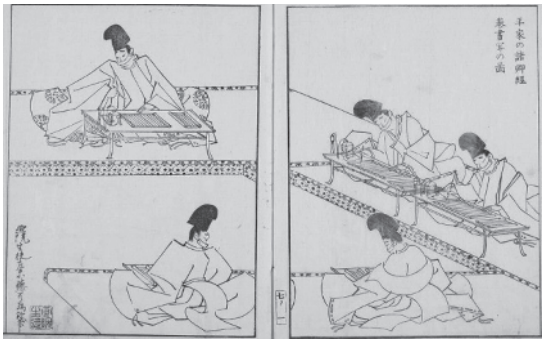
給食マスクが日本以外でほとんど存在しないという1文目は、裏付けがとれないものなので、専門家が話すしかない。「ほとんど」という言葉を加えたのは、最近、韓国の一部で給食マスクが存在するからである[9]。

太平洋戦争中に学校給食マスクが見られるという2文目は、今回の依頼を受けて、優先度を上げて詳細を明らかにしたものである。すでに2020年11月に、内閣情報部（のち情報局）の『写真週報』（1938–1945年）についての調査によって、日本女子大学校附属豊明（ほうめい）初等学校（現 日本女子大学附属豊明小学校）で1944年に児童がマスクをつけて給食を準備する姿を見つけていた（図6）。そのほかに、今回『朝日新聞』と『少女倶楽部』の写真つきの記事を見つけ、豊明小学校の給食マスクの写真が全国に伝わったということが補強された（図7、8）。詳しくは、現在某誌で掲載審査中の「『写真週報』に見るマスク、1938–1945年――勤労奉仕としての給食マスク」にまとめた。

3文目の「自然発生的に」マスクが広まったというのは、2021年4月に公開された「東洋経済オンライン」のインタビュー記事で使った表現である[10]。このことは、コロナ対策で義務づけられていないのにマスクをつけている現代の日本にも通じるものだと考えている。番組スタッフの方は事前にこの記事を読んでおり、当初からこの言葉に注目されていた。これに対して豊本氏が「自然発生ってことは、もっと前からこういう使い方をしていたということですかね」と続け、さらに過去にさかのぼっていった。

そこで登場した4つ目の資料は、『紀伊国名所図会』（1851年）に描かれた和菓子店、駿河屋の様子である（図9）。これは、番組スタッフのお一人が、たまたまNHK「ブラタモリ





7 『朝日新聞』1944 年 3 月 8 日、3 頁

8 『少女倶楽部』1944 年 6 月号、24–25 頁

9 加納諸平・神野易興編『紀伊国名所図会 後編 巻之一 若山補遺』平井五牢堂、1851 年、ホ 12 裏、13 表 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2563499/19。

10 斎藤要人「御汲湯」『熱海錦嚢』芹沢政吉、1897 年、32–33 頁。

11 岡田清編、山野峻峯斎画『厳島図会 7』（『厳島実物図会 2』）1842 年、1 裏、2 表 https://wul.waseda.ac.jp/kotenseki/html/bunko30/bunko30_e0225/index.html。

12 『法然上人行状絵図』14 世紀前半、第 9 巻第 3 図、小松茂美編『法然上人絵伝 上』1990 年、80 頁、藤堂祐範・江藤澂英編『法然上人行状絵図』中外出版、1924 年 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/966898/9。

#37 京都・伏見」の再放送（2021 年 10 月 26 日）に映ったのを見つけられた。もともとは 2016 年 5 月 7 日に放送されていたものだが、コロナ下で新しい回の制作が滞るなか、セレクションとして再放送されたものである。

この駿河屋は、15 世紀に京都の伏見で「鶴屋」として開業した後、17 世紀に徳川頼宣（家康の息子）が駿府、紀伊へと移るたびに随伴し、御用菓子を納めた。なお、和歌山の店舗はちょうど 2022 年 1 月 15 日に放送された「ブラタモリ #195 和歌山」に登場した。

駿河屋の絵には 90 人弱が描かれているが、マスクをつけているのは右下の 26 人である（後ろを向いている人も数えた）。そこは床が高く、天井に吊るされたしめ縄で区別され、「女人無用」とも書かれている[11]。御用菓子を汚さないように用心しているのだろう。

同じような用途は図 10 にも見られる。この図は 19 世紀に描かれた江戸時代の様子である。徳川家光が熱海の温泉を気に入り、それ以来、熱海から江戸に温泉を運ぶようになった。マスクをつけているのは、右下の人々で、旅館の主人たちが温泉を汲んでいる。将軍のお湯を汚さないようにしているのだろう。この「お湯汲み」は、私が「ブラタモリ #27 熱海」の再放送で気づいた（2016 年 1 月 16 日放送、2020 年 9 月 19 日再放送）。番組では古谷（ふるや）旅館に飾られた絵が紹介されたが、それは江崎孝坪（えざきこうへい）（1904–1963）が描いたものである[12]。

そしてさらに時代をさかのぼり、最後の 5 つ目の資料が登場する（図 11）。1160 年代の「平家納経」の様子であるが、描かれたのは 19 世紀である。これは、Bryan D. Lowe 氏の *Ritualized Writing: Buddhist Practice and Scriptural Cultures in Ancient Japan*（2017）の表紙にも使われているものであり、Lowe 氏の tweet でその存在を知った[13]。本書によると如法経でも用いることになっているという（46 頁注）。それを手がかりに画像を探すと、図 12 が見つかった。平家納経の四半世紀後、1188 年の様子を 14 世紀前半に描いたものである。これらのマスクは、人々の息で仏典を汚さないようにするためのものだろう。

3．歴史監修を務めて

これらの資料を読み解いた上で、番組は、日本人がマスクに抵抗感が少なかった理由として、仏教で煩悩や汚れの宿った息を神聖なものにかけないように鼻口を覆う習慣があったことを挙げた。そして、通常の「レキデリ」と同じく、「……ってことかな」、「そう……かもしれません」という決まり文句で番組は終わった。

「歴史に絶対はない」という言葉とともに探究を前面に出したこの番組の形式は、とくに今回のように研究の途上にある内容を紹介する場合にはちょうどよいものだった。もちろん定説とされるものにも「絶対」はないので、あらゆる歴史番組が「……かもしれません」と終わってよいだろう。

昨今の日本人がマスクに抵抗感が少ない理由には、ここで挙げられたほかにもさまざまな歴史の経験が関わっているはずである。感染症予防だけを考えても、結核やペストやインフルエンザの対策としてどのようにマスクが使われてきたのか、論じられるべきことはまだまだ多い[14]。

もう一つ、「レキデリ」で多用される表現に、「ナイス◯◯！」というものがある。これまで確認できたものは、「ナイスクエスチョン！」、「ナイスするどい！」、「ナイス探究！」、「ナイス着眼点！」、「ナイステーマ！」、「ナイス読み取り！」、「ナイス早とちり！」である。今回、現代からの類推で立てた仮説に対して、新たに「ナイス連想！」という返事を提案したが、採用はされなかった。とはいえ、あらゆる歴史探究の場で「ナイス！」と声をかけあうことを期待する。

まだまだマスク史は分からないことだらけである。私もウェブサイトで占領期までのマスク経験を募集しているので、長生きをされているお知り合いの方のお話を共有していただければ幸いである[15]。ありがたいことに、日本女子大学附属豊明小学校の学校給食マスクについては、同窓会の方々にも関心を持っていただき、

歴史資料の掘り起こしや当時の在校生の方々への聞き取りが始まろうとしている。

新型コロナウイルス感染症の流行が長引く中、マスク史探究ももうしばらく続きそうである[16)]。

（住田朋久）

注

1) 本記事の一部は 2022 年 1 月 9 日（日）に開催された生物学史研究会（日本科学史学会生物学史分科会）の発表に基づく。お世話になった番組制作スタッフの方々、研究会の参加者の方々に感謝します。

2) 北多摩薬剤師会「おくすり博物館」https://www.tpa-kitatama.jp/museum/museum_yowa2.html。

3) 林丈二「謎の黒いマスク」『文明開化がやって来た――チョビ助とめぐる明治新聞挿絵』柏書房、2016 年、212–221 頁、台湾華語版（2019 年）https://www.thenewslens.com/article/121113。

4) 住田朋久「鼻口のみを覆うもの」『現代思想』第 48 巻第 7 号（2020 年 5 月号）、191–199 頁。韓国語版は『한국과학사학회지』（『韓国科学史学会誌』）第 42 巻第 3 号で、英語版は *Electronic Journal of Contemporary Japanese Studies* 21(3) で公開されている（それぞれ http://www.khss.or.kr/kjhs/10990、https://www.japanesestudies.org.uk/ejcjs/vol21/iss3/sumida_iijima.html）。以下でも紹介された。Daniel Victor and Mike Ives, "Should We Stash Our Masks for Cold and Flu Season?" (includes an interview with Jaehwan Hyun and Tomohisa Sumida), *New York Times*, May 13, 2021, https://www.nytimes.com/2021/05/13/science/masks-covid-flu-cold.html. この発見から Twitter スレッド「日本におけるマスク」が始まった（https://twitter.com/sumidatomohisa/status/1236142411820105729）。

5) 松本市左衛門編『医療器械図譜』1878 年、95–96 頁 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/833113/52。広告は以下にも収録された（一部の文言が削除されている）。宮武外骨編『文明開化 2 広告篇』半狂堂、1925 年、69 頁 https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/1182351/42。新聞広告と同じ文言のチラシがオークションサイト「ヤフオク！」で販売されていた（https://twitter.com/sumidatomohisa/status/1370543516233859073）。

6) 以下にコメントを寄せた。「2022 年、コロナは風邪のような存在「エンデミック」になるのか」「日経ビジネス電子版」2021 年 12 月 15 日 https://business.nikkei.com/atcl/gen/19/00402/121300002/。「再始動 2022 見えたコロナの先」『日経ビジネス』2021 年 12 月 27 日・2022 年 1 月 3 日号、12–37 頁、25 頁。

7) 速水融『日本を襲ったスペイン・インフルエンザ――人類とウイルスの第一次世界戦争』藤原書店、2006 年。英語版（2015 年）http://id.nii.ac.jp/1368/00006047/。なお、2021 年の大河ドラマ「青天を衝（つ）け」の最終回（NHK 総合、2021 年 12 月 26 日放送）で、1920 年ころに北里柴三郎（きたざと）が黒いマスクをつけながら「感染症予防にはマスクがいちばん。このようにマスクを着用することは公衆衛生上大きな効果があります」と渋沢栄一に語る場面があるが、創作だと考えられる。その放送中に「青天を衝け」の公式 Twitter で日本結核予防協会について紹介されているが（https://twitter.com/nhk_seiten/status/1475060068186001409）、結核予防にマスク着用が推奨されることはあまりなかった。

8) 共同通信の写真に、同年 2 月 14 日に灘尾が東京都中央区立東華小学校を訪れているものがある（https://amanaimages.com/info/infoRM.aspx?SearchKey=23023004846）。

9) 朝日新聞 Globe「日本と韓国の給食をのぞいたら、「格差」の問題が見えてきた」ハフィントンポスト日本版、2015 年 11 月 21 日 https://www.huffingtonpost.jp/asahiglobe/school-lunch_b_8614048.html。なお、エプロンと帽子がオレンジ色なのは、キムチなどの唐辛子が入った料理の汚れがついても目立たないようにするためのようである。給食マスクについては以下でも触れた。Jaehwan Hyun and Tomohisa Sumida, "The Material Lives of Masks in Japan and South Korea," "The Mask—Arrayed" (Max-Planck-Institut für Wissenschaftsgeschichte), October 2, 2020, https://themaskarrayed.net/2020/10/02/the-material-lives-of-masks-in-japan-and-south-korea-a-conversation-between-jaehwan-hyun-and-tomohisa-sumida/.

10) Frontline Press「なぜ日本はマスク好き？その意外な歴史的背景」（住田朋久へのインタビュー）「東洋経済オンライン」2021 年 4 月 10 日 https://toyokeizai.net/articles/-/421202。

11) 以下でも触れられている。近藤壮「駿河屋の菓子木型にみる模様」『共立女子大学文芸学部紀要』第 67 集、37–48 頁 http://id.nii.ac.jp/1087/00003398/。近藤壮「駿河屋の菓子木型に見る模様」（講演、和歌山県立近代美術館、2020 年 4 月 6 日）https://www.youtube.com/watch?v=HUMQTjEDYCA&t=101s。

12) https://atami-furuya.co.jp/history。

13) https://twitter.com/bryandaniellowe/status/1279754869289730049。

14) ペスト対策のためのマスクについては以下がある。Christos Lynteris, Tomohisa Sumida, and Meng

Zhang "The History of Plague Masks in East Asia," "The Mask—Arrayed" (Max-Planck-Institut für Wissenschaftsgeschichte), April 26, 2021, https://themaskarrayed.net/2021/04/26/the-history-of-plague-masks-in-east-asia-a-conversation-between-christos-lynteris-tomohisa-sumida-and-meng-zhang/. Tomohisa Sumida, "Plague Masks in Japan: Reflecting on the 1899 German Debates and the Suffering of Patients/Doctors in Osaka," *East Asian Science, Technology and Society* (forthcoming 2022). 住田朋久「『ペスト』に見るマスク着用の始まり――1899 ～ 1900 年、大阪・肺ペストクラスターと医師の遺言」『週刊医学界新聞』3315 号（2021 年 4 月 5 日）、3 頁、https://www.igaku-shoin.co.jp/paper/archive/y2021/3415_02。Meng Zhang, "From Respirator to Wu's Mask: The Transition of Personal Protective Equipment in the Manchurian Plague," *Journal of Modern Chinese History* 14 (2021): 221–239. 王雨濛「庚戌鼠疫与 " 伍氏口罩 " 的诞生：兼及其历史渊源」『南开学报 (哲学社会科学版)』2021 年、71–85 頁。

15）https://twitter.com/sumidatomohisa/status/1314909042754560000。

16）最近も現在の日本におけるマスクについて取材に応じた。Mike Ives, "Americans Are Just Learning What People in East Asia Already Know about Masks" (includes an interview with Jaehwan Hyun and Tomohisa Sumida), *New York Times*, January 15, 2022, https://www.nytimes.com/2022/01/15/world/china-masks-usa.html. また、NHK World-Japan「Japanology Plus: Mask」（2022 年 4 月 14 日放送）に出演することになった。その経験については「NHK World-Japan「Japanology Plus: Mask」（2022 年 4 月 14 日放送）に出演して（仮）」として寄稿する予定であるが、本号が刊行されるころにはウェブでも番組が公開されているはずである（https://www3.nhk.or.jp/nhkworld/en/tv/japanologyplus/）。